



災害看護 Disaster Nursing Global Leader Degree Program

グローバルリーダー養成プログラム

NEWS LETTER

VOL.1

4月2014

○	● Message from the president, DNGL News1	2
○	● Education Plan	3-4
Z	● DNGL News2・3	5
E	● International Seminar 2013	6
N	● Close up	7
T	● Health Emergency and Disaster Nursing(HEDN)	8



「災害看護グローバルリーダー養成プログラム」は、我が国初の国公立5大学院からなる共同大学院です。



近い将来に発生が予想される南海トラフの巨大地震の可能性、更には自然災害だけではなく、テロや新型インフルエンザなど未曾有なものへの対策も急務であり、その為には、国際力、学際力を備えたイノベーティブなその人材育成が必要です。そこでこれまで災害看護学を牽引してきた高知県立大学、兵庫県立大学、千葉大学、東京医科歯科大学、日本赤十字看護大学の国公私立の5大学院が一丸となり、人間の安全保障を共通理念とし、それぞれ蓄積してきた資源を共有し、日本や世界で求められている災害看護に関する多くの課題に的確に対応・解決し、学際的・国際的指導力を発揮し、人々の健康社会構築と安全・安心・自立に寄与する「災害看護グローバルリーダー」の育成に取り組むことに致しました。



皆様方には、本プログラムの災害看護教育・研究の活動に一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

NEWS1 「共同災害看護学専攻」の設置届出が受理されました



2014年4月の開設に向けて、高知県立大学、兵庫県立大学、日本赤十字看護大学の3つの公私立大学が「共同災害看護学専攻」の設置届出を文部科学省に申請し、この度設置届出が受理されました。また、千葉大学、東京医科歯科大学においても同専攻の設置報告をし、受理されています。





災害看護の高度な実践力の育成

5年間通して実践的な演習を行い、特に1～2年次を中心に実施します。

例えば、長期避難をされている人々の健康調査と健康支援の企画・実施、結果の集計・分析、災害拠点病院や自治体との共同研究などに参画します。

また、他機関協働（行政、病院、学校、企業、住民組織）による地域防災プログラムなどを通して、多職種連携やチームリーダーとしての能力も習得します。

臨地実習指導者、メンター、プリセプターなどの協力体制を整えて、指導にあたります。

教育能力の育成

1～3年次を中心として、単なるTA（ティーチングアシスタント）としてではなく、学生のそれまでの経験等に基づき、個々の学生が継続して教育能力を修得するための企画・実践できるよう指導します。

教育・研究開発、研究インターン制度により研究能力の育成

異業種・異分野（学問）交流：グローバルリーダーの資質を養うために、「演習」や「実習」において学生の積極的な国内外の異業種交流や異分野交流の機会を数多く設定し、学際的視点を育みます。

3～5年次を中心として、企業や行政との共同研究体制及び研究インターンシップ制度、RA（リサーチアシスタント）制度を取り入れながら、実践的研究能力を養います。

インターンシップの実践性を備えた企画力や開発力の育成

産官学・研究所等からの特任教員、非常勤講師による指導やメンター等の環境整備を行います。

これまで看護職の教育内容としては全くなかった、社会へのアピール方法とアピールの実践、マスコミ対応術や記者会見等のスキルを学びます。

また、「災害看護グローバルコーディネーション論」「災害看護リーダーシップ論」では、アサーティブトレーニングなどの講座、研修、実地訓練の機会を設けます。

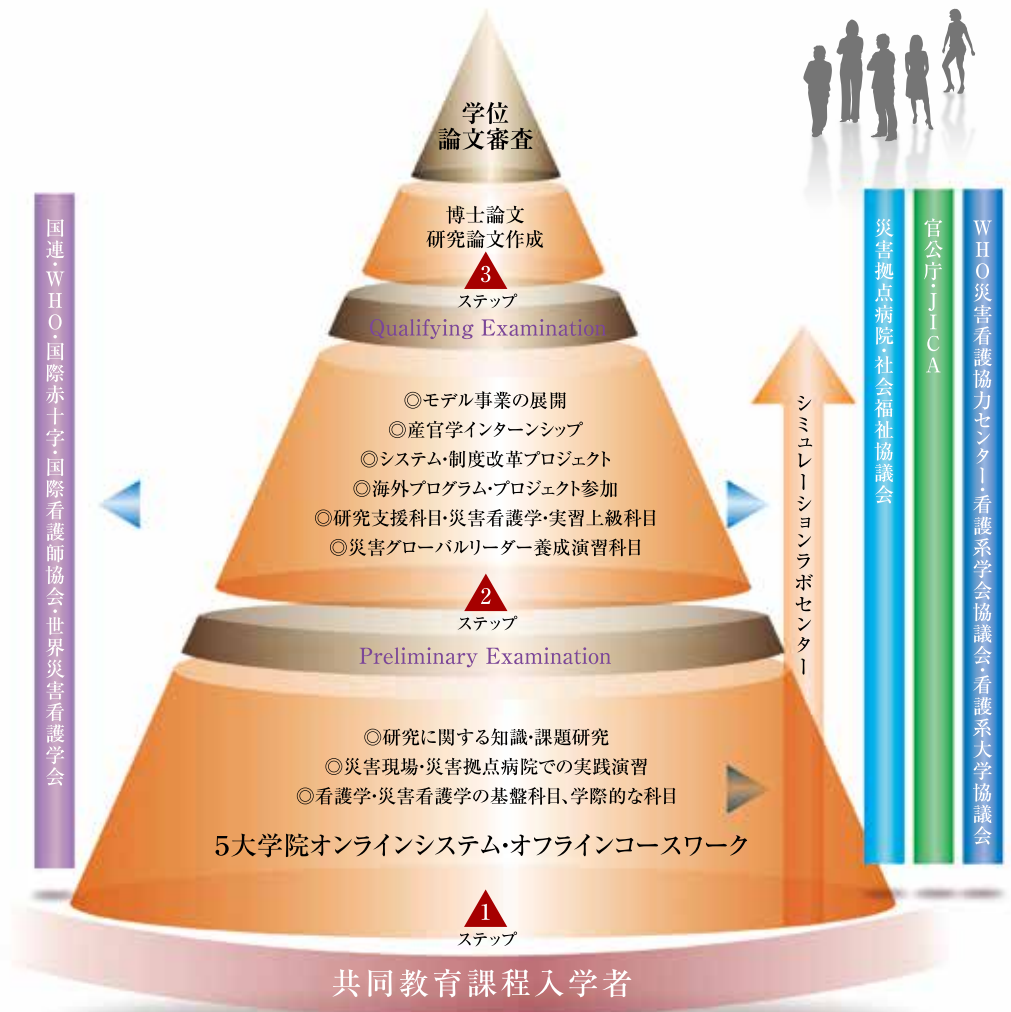
養成する人材像

1 Step 2 Step 3 Step

災害時にもその人らしく健康に生きることを支援できる人材

災害サイクルのすべての段階で「健康に生きるための政策提案」をできる人材

学際的・国際的な基盤で研究開発し、産官学と連携し、変革に向けて提案推進できる人材



参加型から参画型の授業へ ～一步踏み込んだ授業参画型システムの開発～



本プログラムは離れた5つの大学による共同教育課程であり、日々の講義を一堂に会して行うことはできません。もちろん、実習等でキャンパスに集まって集合教育をすることはありますが、日々の講義は情報ネットワークを用いた遠隔授業が中心になります。現在のネットワーク技術を用いれば、物理的に離れた教員や同級生を近づけ、仮想の教室で講義を行うことができます。日常的に行われている、一般的な大学院の授業の環境を仮想的に実現することは可能です。しかし、ディスカッションはするものの、参加するだけで良いのだろうかという本プログラムは自問自答して来ました。単にその場に来るといふ参加形態になりがちな遠隔授業において、参加すればよいだけではなく、遠隔授業を逆手にとって、一步踏み込んで授業に参画できる様なシステム開発を試行錯誤しています。



日常の遠隔授業そのものが、災害時のシミュレーション ～災害看護グローバルリーダー活動の実践～



ひとたび災害が発生すると、関係者は招集され、収集された情報を基に対策を議論します。しかし、大きな災害になればなるほど、一堂に会すること、そして必要な情報を収集することは難しくなります。災害により大きな被害を被ることは予想されますが、現代のIT技術を上手に利用することにより、一堂に会しなくても、あるいは一堂に会するよりは更にスピーディーに情報を収集しながら議論の場を確保することができます。本プログラムの授業は、日々の授業そのものが、この形態を有しており、科目の内容によっては、まさに災害時の情報収集、情報分析、情報をベースとした議論、および意思決定をシミュレートするものです。

効果・効率的な遠隔授業の実現 ～事前課題と各種レポートによる確かな学習～



効果・効率的な遠隔授業の実現には、3つの要件が必要だと考えています。まずは、効果的な学習を実現する遠隔授業の基本方針。そして、離れた5大学を結び仮想教室を構築するTV会議システム。最後に、学生と教材の管理、および学生の学習進捗状況の管理を行うLearning Management System(LMS)です。基本方針は、どのような授業設計をすることにより、参画型のより効果的な授業を実現するかです。本プログラムでは、講義に基づいた事前課題の提示と、事前課題および講義や授業中のディスカッションに対応したレポートの提出を大切にしています。更に、レポートは、成績をつけるためばかりではなく、各コマの学習内容を定着するためのコマレポート。幾つかのコマをグループ化し、その内容に対応したレポート、そして最後に科目レポートというように、学習内容を一つひとつ身に付けるための工夫をし、それらの管理をLMSによって実現します。

NEWS2 South Wales 大学夏期研修参加報告 ～フィンランドの森で得る、サバイバル技術と国際性～ 千葉大学 看護学研究科 専任講師 駒形 朋子



英国の South Wales 大学 Disaster Healthcare course（オンライン修士課程）では、毎年フィンランドまたは英国にて約 2 週間、夏期集合研修が実施され、習熟度別の災害時フィールドシミュレーションと、講義や研究指導を受けます。このコースは災害時のヘルスケア専門職の育成を目指し、特に国際性や異文化での活動に焦点を当てていることから、DNGL の学生の研修への参加を含めた South Wales 大学および HAMK University of Applied Science との協働の可能性を検討する目的で、千葉と高知の教員がフィンランド・ハメリナ郊外の森で行われた 2013 年の夏期研修に参加しました。最初の 1 週間で、1 年生は野外でのサバイバルキャンプ、2, 3 年生は災害発生シナリオに沿った避難所・診療所設置計画を立案・実施します。各学年約 10 名、多国籍・多職種（看護職、救命士、薬剤師、ソーシャルワーカー等）の社会人学生が、災害時を模した厳しい環境下で、協力しながら文字通りサバイブのための活動や技術を学んだり、夜遅くまで議論を重ね避難所設置を実現にこぎつけるキャンプは、非常にリアルで実り多いものでした。後半の 1 週間は、キャンプで実施した活動の復習や講義、個別の研究指導が行われました。現在、2014 年度の夏期研修に DNGL 学生が参加できるよう準備を進めています。学生が災害時ヘルスケアの学びにとどまらず、国際的環境に慣れ、同じ志を持つ仲間を世界中に作る機会を得られるよう支援したいと願っています。



NEWS3 コンゴ民主共和国 インターシップ報告 高知県立大学 DNGL 特別研究員 Nlandu Ngatu 看護学研究科 学生 田中 圭



グローバルな視点を持った看護師を目指す DNGL の海外インターシップ先として、「国家・地域間の健康格差」や「災害・感染症の大規模化」などの看護課題を含むコンゴ民主共和国において、約 1 週間の海外インターンシップの試行を行いました。

滞在期間中には、AFMED 学会参加、コンゴ共和国 JICA 訪問、キンシャサ大学訪問（ワークショップ参加）、私立病院訪問などを行い、現地の看護師・医師と意見交換するなど、大変貴重な機会となりました。

またインターンシップ先での実施可能な研修内容の探究と共に、紛争地域や異文化での研修における留意や健康危機管理の必要性を検討することが明らかとなり、非常に実りの多いインターンシップ研修となりました。





第1回国際セミナーは、2013年6月14日（金）に丸ビルホール（東京都千代田区）にて、“災害看護における倫理的課題：災害時の倫理と看護実践（Ethical Issues of Disaster Nursing：Ethics Knowledge and Practice for Nurses in Times of Disaster）”をテーマに開催されました。講演Ⅰでは、看護倫理分野の第1人者であるカリフォルニア大学サンフランシスコ校名誉教授のアン・デイビス先生（Dr. Anne Davis）に、“災害倫理（Disaster Ethics）”と題して災害看護に必要な倫理の基本や看護師たちの倫理的な責任についてお話をいただきました。講演Ⅱでは、香港理工大学・看護学部長のサマンサ・パン先生に“災害看護における倫理的な課題（Ethical Challenges in Disaster Nursing）”と題して、2003年に香港で起こったSARSの経験を通して学んだことを基に、災害状況における倫理的なジレンマや判断についてのさまざまなケースについてお話をいただきました。講演の後、座長の兵庫県立大学看護学部長の片田範子先生の司会で質疑応答を行い、盛会裡のうちに閉会しました。



第2回国際セミナーは、2013年11月24日（日）に兵庫県立淡路夢舞台国際会議場にて“災害看護におけるグローバルリーダーとは（What a Global Leader to be?）”をテーマに開催されました。本セミナーでは、現在も世界の第一線で活躍するグローバルリーダーをお招きしました。お一人は、ミリアム・ハースフェルド先生（Dr. Miriam Hirschfeld）で、1989年から9年間、WHO看護局の首席専門官を務め、その後、看護師として初めて保健人材開発部の事務局長に任命され、世界の健康問題に取り組んできた方です。ジュディ・オルトン先生（Dr. Judith Oulton）は、1995年から2008年まで国際看護師協会（ICN）のCOEを務め、130ヶ国を超える看護師協会等の指導に当たってきたリーダーです。その二人の講師から災害看護のグローバルリーダー像やグローバルな協働や国際支援のあり方についての講演をいただきました。その後、DNGL責任大学である高知県立大学学長の南裕子先生が加わり、世界の看護リーダーの三人による鼎談が行われました。鼎談では、グローバルに働く看護職のキャリアパスや必要となる能力などについて語り合われ、世界で活躍できる災害看護リーダーをめざす参加者にとっては刺激的なセミナーとなりました。



Dr. Miriam Hirschfeld
（元世界保健機関主任署護技官）



Dr. Judith Oulton
（元国際看護師協会事務局長）



南 裕子 先生
（高知県立大学学長）



災害看護の経験知獲得を目指したシミュレーションセンター 災害看護の実務能力養成には、経験知の獲得が不可欠

兵庫県立大学地域ケア開発研究所 所長 山本 あい子

本プログラムでは、自然災害や感染拡大、細菌や化学物資等、多くの被害状況を想定したシミュレーション環境を提供します。その対象時期は急性期、中長期、準備期を、対象規模は被災者個人・集団・地域等を想定しています。教育コンテンツの制作には、DNGL5大学の教員が関わり、これまでの災害看護活動の経験を基に、シミュレーションの専門家と協同して取り組んでいます。患者シミュレータ、机上シミュレーション、被災状況の情報を取めたデータベース等を活用したコンピュータシミュレーションの機材・手法を駆使することでシミュレーション環境が実現されます。更に、これらの環境は遠隔授業システムによって、本プログラムに参画する大学間で共有されます。兵庫県立大学が災害看護シミュレーションラボセンターとして、このようなシミュレーションプログラム全体の円滑な運営を担っています。シミュレーション教材を通して学び、災害に対して共に挑戦してみませんか？



大規模災害の防災・減災に向けた看護 GL の役割構築に向けて

東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科

共同災害看護学専攻教授 佐々木 吉子

災害急性期の救援や医療活動は、平時にそのシステム整備ができていてこそ、その力を最大限に発揮することができます。東京医科歯科大学は、災害拠点病院である附属病院や医療圏内の小規模医療施設、および行政と協働し、大規模災害発災時の医療資源の有効活用や平時から個々の施設の対応力強化を目指した連携モデルの考案と、システム構築・稼動における看護グローバルリーダーの役割構築に向けた研究的取り組みを始めています。熱意ある大学院生の参画を期待しています。



国内外の防災・減災、被災者支援をフィールドから学ぶ！

日本赤十字看護大学 共同災害看護学専攻特任講師 内木 美恵

東日本大震災では多くの人材や物資が投入されましたが、必要とされる保健医療が適切に配分され、効果的な支援とは言い難いものでした。世界では、多様な大災害が起っていますが、多職種と連携して被災者の健康や生活を守られているかまだ疑問が残ります。災害は予期せず起こります。過去、現在の被災地から多くの事を学び、未来に起こるであろう災害時には、人々の命を守り、健康の危機に晒す状態を回避しなくてはなりません。



人々の日常生活に寄り添う、力強く確実なリーダーの育成を

千葉大学大学院看護学研究科 共同災害看護学専攻特任講師 駒形 朋子

東日本大震災から間もなく3年になろうとしています。被災された人々の苦難は未だ続いています。千葉大学では、災害後中長期の「人々が日常生活を取り戻すための支援」に活躍できる災害看護グローバルリーダーの養成に、総合大学の豊かな教育資源と、看護学高等教育を牽引してきた実践・教育・研究における底力を結集して取り組んでいます。



投稿募集 !! 世界初、災害看護国際学術雑誌 HEDN スタート !



世界各地を襲う自然災害、紛争やテロ、感染症の蔓延など人々の生命の危機や健康が脅かされ、災害は大規模化、長期化する傾向があります。

看護職は災害の現場において、発災直後から復興に向け、あらゆる年代の個人および家族、集団、コミュニティを対象に、幅広く活動してきましたが、災害看護の国際雑誌はいまだなく、知識体系の整備が急がれます。

そこで災害看護の知を集積し世界へ発信するために世界初の災害看護国際学術雑誌 Health Emergency and Disaster Nursing (HEDN) を立ち上げました。

HEDN はオンラインをベースとしたジャーナルです。

投稿、掲載料は無料です。

災害看護の知を結集し、リアルタイムの情報を発信するため、教員、研究者、臨床家、学生、活動家など、様々な場で尽力する方々の原稿を募集します。

投稿分野は原著（質的、量的、歴史的研究、事例研究、文献レビュー等）から活動報告、論説、コメント、書評、映像等など広く募集します。

論文は基本的に査読を経ての掲載になります。

また、内容については編集委員会で認められたものが掲載されますので、ご理解いただきたくお願いいたします。

HEDN は災害看護リーダー（Disaster Nursing Global Leader: DNGL）養成プログラムの一環として運営されます。

●ご投稿をお待ちしています。

<http://hedn.jp>

●お問い合わせは HEDN 編集事務局

email: hedn-editorial@primeassociates.jp